

### 地域に飛び出す市民国際プラザ!

『市民国際プラザ』では、国際協力や多文化共生に関する自治体、地域国際化協会、NGO/NPO等のための連携相談を行っています。更に、各地の**先進的な活動**を実際に取材したり、情報収集を行い、本ダイジェストでご紹介しています。

#### ○ピナット～外国人支援ともだちネット <http://pinatmitaka.wixsite.com/pinat>

2018年9月26日 場所：ピナット～外国人支援ともだちネット（東京都三鷹市）



#### 草の根から外国人親子と行政サービスをつなぎ、全体のシステムの改善に貢献する

三鷹市のピナット～外国人支援ともだちネットは、1992年フィリピンのピナツボ火山噴火被災者支援と交流を目的に「ピナツボ復興むさしのネット」としてスタートしました。その後、地域の外国人支援や国際理解教育に取り組むようになり、活動の中心を在住外国人支援とするために2015年団体名を変更しました。活動はボランティアによって支えられ、敢えてNPOなどの法人格は取得せず、地域の中で独自の役割を果たしています。「大人対象の日本語教室」、「子ども学習支援教室」、「乳幼児を育てる外国人ママ支援」、「寄り添い」型支援などを行い、また、これまでのフィリピン支援や在住外国人支援、国際理解教育活動等のネットワークをいかながら様々な団体や行政と協力関係を持ちつつ活動しています。三鷹市、三鷹国際交流協会、社会福祉協議会、子育て支援施設と連携する他、東京外国語大学や国際基督教大学からも多くのボランティアが参加しています。ピナットの特徴的な活動を2つご紹介します。

**子ども支援教室：**三鷹市在住の、海外から来日した子どもたちは、教育委員会や三鷹国際交流協会が提供する日本語や教科学習の支援が受けられます。しかし、日本で生まれ育った「外国とつながる子どもたち」は公的支援からまれてしまいがちです。日本語で日常会話ができて、日本語で学習するための言語を習得していない子どもたちのサポート、外国人保護者に対する教育相談や情報提供、そして子どもたちが自らのアイデンティティを形成するための居場所づくりとして行っている支援です。

**「寄り添い」型支援：**外国人は、公的な子育て支援サービスを知らなかったり、言葉の壁や公的機関への敷居の高さが理由でサービスを受けれない状況があります。ピナットでは外国人母子に子育て支援施設などの情報を提供するだけでなく、同行し、「やさしい日本語」でのコミュニケーションの取り方を各機関の人々にも見ていただくことで、彼らに外国人母子との関わり方のヒントを提供することも目指しているそうです。また、そうした機会に外国人や各機関の人々に市の通訳翻訳サービスについても紹介しているそうです。外国人が自ら行政サービスを利用できるよう全体システムの見直しにつなげようという試みでもあります。



★★地域で長年活動を続けてきている福祉関係の人たちに、国際交流協会やピナットの外国人支援の取り組みを知ってもらおうと、「外国人支援にかかわる団体訪問ツアー」を企画実施したそうです。民生委員や高齢者福祉に携わる方、社会福祉協議会の職員など13名が参加したとのこと。よりよい地域づくりのために、独自の方法で効果を上げ、進化してこられたピナットの今後に期待が高まります！

←「外国人支援にかかわる団体訪問ツアー」の様子

#### ○グローバルフェスタJAPAN2018が開催！

2018年9月29日 場所：お台場センタープラザ（東京都江東区）



#### 「Action for all ～小さなことから変わる明日へ～」

日本最大級の国際協カイベント、グローバルフェスタJAPAN2018が開催されました。外務省・JICA・国際協力NGOセンターが共催し、NGO・国際機関・企業等、国際協力に携わる多様なアクターが集まる年に1度のイベントです。国際協力の現状や必要性について理解を深めてもらうことを目的としています。全国から集まった団体は、支援の方法も様々。日本の地域に根差した活動をする一方で、途上国支援を行っているNGOもあります。例えば、アジアの女性と子どもネットワークは、伝統文化の復興を通して、日本とタイ双方の子どもが伝統文化の継承の大切さを学ぶプロジェクトを行っています。また、会場にはアフリカ諸国を中心に大使館も出展し、大使館員が振舞う各国の味に来場者が舌鼓を打つ姿も。国際協力と一口でいっても様々なかかわり方があります。来年は足を運んでみてはいかがでしょうか。

### ○ぼうさいこくたい 2018

2018年10月14日 場所：東京ビックサイト・国営東京臨海広域防災公園（東京都江東区）

11 住み続けられる  
まちづくりを



### だれひとりとのこさない～インクルーシブ防災における自治体・NPO・地域住民の連携とは？

内閣府が主催する「防災推進国民大会（ぼうさいこくたい）」に参加してきました。

平成27年の国連防災世界会議で採択された「仙台防災枠組2015-2030」をきっかけにはじまった大会で、今年で3年目を迎えます。今年のテーマは「大規模災害に備える ～みんなの連携の輪を地域で強くする～」。産学官、地域、分野を超えた連携を目指し、2日間にわたってセミナーやブースの展示が行われました。防災技術に関する展示はもちろんのこと、そのテーマ通り、セクター間の連携やしきみ作りに関するセッションが多く企画されていたのが印象的でした。

多文化共生や国際化の取り組みのヒントになる部分があると感じたので、特に印象に残った大分県別府市のセッションを紹介させていただきます。このセッションは「だれひとりとのこさない防災～別府市におけるインクルーシブ防災の実践から～」（主催：日本財団）と題し、別府市における要配慮者と共につくり・実践する防災の取り組みが紹介されました。プロジェクトに関わる、別府市共創戦略室防災危機管理課の村野氏、同志社大学社会学部の立木教授とIIHOE（人と組織と地球のための国際研究所）の川北氏の3名による事例紹介の他、他地域・他分野への展開の可能性についてもディスカッションが行われました。



↑クロージングセッションの様子

特に、1) アクター間の連携、2) 全員参加の仕組みづくり、3) 長期的な取り組み、という3点で優れた事例だと感じました。

**(1) アクター間の連携 計画から実践まで** 当プロジェクトでは、地域の住民と障がい者・福祉関係者によるNPO団体を、別府市役所の村野氏がコーディネーター役として繋ぐことで、防災プロジェクトを行っています。これまでに、合同の避難訓練、障がい者一人ずつの避難計画の策定が行われましたが、そのどちらにおいても、実施前の計画の段階から地域住民や障がい者本人もしくは本人の代弁者としての相談支援専門員が計画に携わっていることが大きな特徴です。**2) 全員参加の仕組みづくり** 次に、計画段階から全てのアクターが携わることにより、全員が主体的にプロジェクトに関わるという好循環が生まれています。



↑同時開催の東京都主催の防災展では災害救助犬のデモンストレーションも行われました。

また、実際に個別計画を策定することになる相談支援専門員には、日本財団からの助成金の手当として支給され、業務の片手間に行うのではなく、正式な仕事として取り組んでもらう仕組みが作られています。**3) 長期的な取り組み** また、プロジェクトの期間を3年間とすることで、1年目の学びを2年目に活かす、といった発展的な取り組みが可能となっています。実際に1年目に行った避難訓練だけでは知識の定着に効果がみられないことがアンケートで判明し、その結果を活かして2年目の避難計画の策定が行われています。

本事例自体は要配慮者の中でも障がい者に重点を置いています。他の要配慮者への展開も十分可能で、実際に別府市では高齢者を対象とした取り組みを想定・計画しているそう

です。例えば、避難計画・避難所運営に関しては、外国人住民に計画の段階から関わってもらおう等、今後の多文化共生や災害時の外国人対応のあり方にも活かすことができるのではないのでしょうか。



↑セッション会場の通路には各団体のブースが並びます。ゆるキャラの姿も。



～ 市民国際プラザを広く皆様に知っていただくために～

市民国際プラザのFacebookに「いいね！」をお願いします！

